
彼と私のライフワーク

斎藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と私のライフワーク

【Nコード】

N5237W

【作者名】

斎藤

【あらすじ】

ルームシェアの相手である親友が、急遽一人暮らしをすることになった。

欠員補充のために学生用掲示板で呼びかけてみると…

その貼り紙をもって現れたのは男子学生！？

しかも公衆の面前でホモセクシャルで安全牌と公然アピール！？

~~~~~私は！この世で一番男が嫌い、募集したのは女子のみだッ！！！

私：アキとちょっと変わった彼：ワタルのライフストーリー！。



## ？【発端はチラシ一枚】（前書き）

### 【注意】

話の設定上軽いB・L表現があるかと思えます。

その他ネタとしての、下品な話題・表現もあるかと。

苦手な方はよろしければご自分で避けて頂けると幸いです。

また、現代日本という場所で考えていますが設定としてフィクションであり町名なども何ら関わりないことをご念頭に置き、楽しんで頂ければ嬉しいです。

常時失踪予定。気長に書き進めたいと思います。

？【発端はチラシ一枚】

昼食時のざわつく大学構内のとある食堂。

安価で早さが売りで味は要努力ありと、どこでも同じであろう苦学生でもまあ値の届きやすい範囲であるとしか言いようのない、正に普通の食堂である。

腹を満たすだけで十分な食事にありつくには御の字といったところ。

この春大学二回生に無事繰り上がり、麗らかな季節というには頭を抱えるしかない考え事に頭を悩めつつ日々を送っていたアキは。うどんをすすった手を止めざるを得なかった、背後に立つ人物に対し思いつきり眉を潜めて睨みつつ、トリップした思考を呼び戻した。

「……もう一度？」

「このルームシェア募集を見て来たんだけど」  
君だよ、秋本さんてと付け足して。

明るいトーンの短い茶髪にスラリとした体型の、見た目上確かに男性形の人間は。

見覚えのあるチラシをびらびらと揺らしながら、笑みを浮かべてそ

う告げた。

聞き間違えた訳ではないらしいその言葉に、腹の底からため息とともに食したうどんまで吐きだしかねない気分である。

『そのゴキブリでも見るような眼やめなさい』と再三注意してきた親友の顔を思い起こしながら、アキは冷静になろうと鬱憤を堪えた。

事の発端は、その親友に始まる。

中学の塾仲間であつた彼女、柏谷<sup>かしわや</sup>ありさと交友が始まったのは高校受験を控えた夏期講習から。

同クラスとしての初日、偶然席が隣り合い、波長が合ったか共に帰宅するまでの電車仲間となった。

希望進路は異なっていたが、切磋琢磨する仲としては丁度良く、すぐに自宅を行き来する程に仲良くなった。

高校へ入学してもその付き合いは薄れることはなく、アキとしてもありさとしても、学校は違えど互いが互いを一番の親友とみる付き合いを重ねるに至った。

そしてアキにとっての忌まわしい吐き捨てたい記憶も同時に呼び覚ますものだが、それはここで思い起こすことではない。

ぼろぼろの身ながらも大学受験で必死になったのは、ありさが美大として名のある都会に居る大学を希望し、なお且つルームシエ

アをしないかと持ちかけてきたからであつた。

アキにとって故郷はただの離れたい場所ではなかったし、都会にも多少の憧れがあつた。

とある事情により極端に人付き合いが苦手になつていた身として、大親友の彼女とのルームシェアという新生活も想像するだけでも楽しいに違いないと思う他なかった。

絆された感あつても、私のために頑張れと訴えられればそこまで悪い気もせず。

アキは猛勉強の末、彼女の希望大学に隣接する私立大学の経済学部に入學を果たし、見事授業料半無償の奨学生としての切符を得た。

一回生としての一年はあつという間に経ち、想像通り笑顔のままに過ごせた日々と言えた。

意見のぶつかり合いもあれば、数日顔を合わさない日もあつたけれど。

より深く互いを理解し、成人に向かう身としても勉強になる時間であつた。

時は巡り、二度目の春の暮らしを迎えつつ。

ありさは爆弾を投下した。

「この家、出ようと思う」

「……………はい？」

言葉を理解するのに随分と時間をかけたけれど、意味を理解した途端ドツと嫌な汗が噴き出した。

一年を送る上で、言いっこなしにするべく互いに解決したい点には口を紡がず言い合おうと約束し、そしてその都度喧嘩しては理解を

重ねてきた。

朝のシャワー権はありさが訴え、なるべく朝食夕食をともにとはアキが。

自室以外の居間とキッチン、風呂場と玄関の掃除は交代制の受け持ち。

調理の好きなアキが食事を作ることが多いから、皿荒いはありさが洗濯は各自でもあり、一回頼めば相応の取引を。

テレビ番組の選択権はゴミだしやマッサージで割り切ることが多かった。

そうして2人で生活してきた。

その片方が欠けるといいうのは、  
いったいどういうことなのだろうか。

いつの間にか俯いていた頭に、ぽふんと柔らかい手が当てられてゆっくりその主を仰ぐ。

「アキとの生活が嫌になったんじゃない。苦である訳がない。私に、ちよつと事情が出来ちゃったの。聞いてくれる？」

困ったように笑うその表情に。いつもより落とした声音に。

彼女にも葛藤があった上でのことなのだと、気付いた。

常々人の側に立つて考えることが出来る余裕を羨ましいと言うありさが、私の気持ちを汲もうとしないことなどないのだ。

だからこそ、私が落ち着くように笑って見せてくれる。少しでも言葉を伝えようとしてくれる。



思わず目頭が熱くなってしまったが、数回呼吸を重ねてくりと頷いた。

「あのね、彫刻を選択したいって言って、その専攻試験も通ったって話したじゃない」

「そうだね、お祝いたもんね」

「うん。で、この春から本格的に学べるの。真田先生の指導貰える」  
「そうだね。入学前から、ずうっと、その先生のことばかりだった」

新居を決めて下見にお互いの学校へ足を運べば、ありさはその真田海道という新進気鋭として海外にも広く名を売り。

後進の育成に早くも大学講師という道を選んだ60後半の芸術家のことを、それはもう熱く熱く語った。

細部の細部までこだわる、立体のものとしての可能性。見方。形を決められ見方を定められるのを拒み、様々な視点から見られて理解を得られてこそ作品の全貌を委ねられるのだとか。その指導者の美術性も勿論、メディア媒体で伝わる微かな人隣りや人柄に惹かれ。

その狭い門下を彼女はくぐった。

現役合格など稀のものと聞き及んでいたのだ。入ってからの試験に向けての猛攻も、彼女の部屋の荒れ方を見れば押して知るべしことだった。

「真田先生が何か言ったの？」

「一人のタマゴとして、自分で立てないのは視界を狭めるって」

「……っていうと？」

「ルームシェアしてることを話したの。人と触れ合う生活から得ら

れるものもあるけど、一人だけの空間だからこそ触れる見方もあるって言われたわ。しんどい時に生活の基盤から支えてくれる友は得難く変え難いものだけど、本当に一人きりの生活であれば此处にいられたか？って聞かれて。思わず黙ったの」

「……それは、私が氣遣ったことが駄目だって言われてるのかな」  
「違う違う。あの人はそこまで考えてないよ。ただ甘える場所が帰る場所と同じってというのが、これからの私にとって良いものかどうか考えてみるってことだと思う」

一人きりの暮らしが好きらしいから、単純に疑問に思っただけだと思うよと。

ありさは眉を寄せて笑った。

「確かに、アキの好意に甘えてたのは本当だから。助力がなくなっちゃご飯食べずにしゃかりきになって、人としての暮らしも危うかったかも」

「それは、私がしたかったからであって……」

「でもおんぶされてたわ。夜食食べたいって起こしちゃったこともあった、栄養とれって怒られて、課題こなしてる最中に突撃されて食べさせられたこともあった」

温くなっただろうレモネードを口元へ寄せて、ありさは目を伏せて軽く笑んだ。

「実家通いの子もいる。一人暮らしの子もいる。場合は様々。でも、一度自分の力だけで進むことも私には必要だなんて、思ったの」

「アキのことを、家族みたいに思ってる。だからふざけながらも、懇々と甘えてしまっていた。…良い機会かなって、思ったのよ」

「私にとっても、                      あんたにとっても、ね」

さらりと、長いウェーブのかかった深い栗色の髪が一房、小首を傾げて笑った彼女の胸元へと流れた。

高校の時は黒だった。パーマもかかっていなかった。

少し円やかだった顎のラインも、忙しい生活ゆえか引き締まっていた。

爪先にはかなり気を遣っていたのに、今では画材が何かでよく汚れが残っている。

時間が、流れている。

生きることを見据えて、私に正直でありたいのだと言ったありさの、あの頃と変わってないもの、変わったもの。

同じだけ、私も少しずつ、変わらなくてはならない。

成長しなければ、この親友に胸を張ってはもらえないのだから。

「…もう、住む所も見つけてるんでしょ」

「ばれたか。最終手段は泣き落としだったのよー」

幾らなんでもそれはあまりにもかっこわるいから良かったわーと、呑気に笑っている。

少しばかりその樂觀さに腹が立って、つんけんしながら言ってる。

「じゃあ、私の信用するありさの審美眼に則って、きちんと相手見つけてきてよね」

「え、あたしがあ？！」

「当たり前でしょ。あんたが勝手するんだから、その分埋められる相手じゃないと頷きませんからね。あと家賃も余分に払うつもりな  
い」

「うへえ…払えて2カ月分なんだけど」

「払いません。あと引越もしない」

「確かに駅から徒歩5分の安い商店街ありいの、優しいおばさま管理の優良物件だけどさ…」

面倒がつてぶうぶうたれる、この困ったちゃん。

それでもこうして晒してくれるのは、私が親友であり、彼女の理解者であり。

「ありが、此处を私たち2人の家にしようって言ったのよ？」

“家族”は“家”で待つもんでしょ、一人の場所へ移るなんてと

んでもないわよ」

この家こそが2人の家なのだ。  
移る気になど、なれるもんですか。

呆氣にとられた彼女を笑って。  
引っ越しなんて大面倒頑張って、と冗談ぽく言ってやった。

それが3週間前。

先週からは春学期の講義が始まった。

一足先に始まっていたありさは、講義や課題にバイトとその最中に荷物を少しずつ梱包し、私が初日の講義を終えた頃に部屋を空けた。肝心の欠員は、幾度と彼女から紹介された人物に会ってはみたが。時期が時期なのか、それとも提示した条件が条件なのかこれと頷ける人がいなかった。

「アキ、あんたどうすんの」

「絶対！これだけは譲らない」

3人目の候補として連れてきた友人と対面して、五分と経たずある一言を皮きりに合わぬと告げて喫茶から出てきた。

ありさとしてはその条件でも見合うとして呼び出したようだが、生活を共にする上で妥協してはならないこととアキは決めているのだ。我が家へと向かいながら、背後からありさが宥めてくる。

「しょーがないでしょうが。今時の女の子が家に彼氏呼びたくない訳がないでしょう」

「昭和の家庭と言えば良いわよ。電話するのもびくびくして寄りつかないでほしいわ」

「…私も約束しただけだなあ」

「正直真に受けなかったんでしょ。ドン引きしてたのが良い証拠よ」  
「まあそこらは悪かったと思ってるわ」

物件として紹介すれば、あの家は正しく優良なのだ。  
折半する家賃もかかる光熱費も初めから提示済み。

ベージュの煉瓦と朱色の屋根がアクセントのアンティークな外観も、玄関のセキュリティも値段のわりに整っている。

人の良い管理人の椎名さんも、孫のように扱ってくれるおかげで信頼のおける人なのだ。

ほいほい釣れた友人にもう一つ条件を告げれば、大概は変な顔をしつつも了解了解と返事をくれたらしいが。

やはり身内の気易さとも言つのか、きっぱり他人様として対峙すれば面白いほどぼろが出る。

アキとしてはその辺り、顔を使い分けるのが得意なものになってしまったからこそその接点である。

ありさも適度に人当たりの良さを押し出し判断するが、アキほど深く考えられない事情があるのだ。

「もう少しさ、妥協しようよ」

「断る。男を住居に入れるなんてぜっ・た・い！いや」

「引つ越し屋は入れたくせに」  
「それは社会で生きる上仕方ないでしょう。半分が男とかマジないけど」

家に立ち入る男を想像しただけで出た鳥肌をありさの眼前に見せつける。

わかったわかった、と呆れながらも彼女は笑って腕を下ろさせた。

「でも、これであたしも伝手なくなっちゃった訳だし。あんたの大学で募集かけてみてよ」

「余計じゃないよ。共学だし」

「荒治療で入ったのに改善が見られないのはどういうことかね？」

「本人にその気がないからよ」

「自信持つて言うない。あんたの言い回しが的確なのは知ってるけど、あたしの他にちゃんと友達作んないと」

「大学で困ってる訳じゃないもの。一人で出来る」

「社会で男嫌いですだなんて、通用しないっつーの」

男はゴキブリ以下と云い切って他ないアキは、その言葉通り大の男嫌いである（もちろん建前と八つ橋にくるむという言葉は知っている）。

彼女とルームシェアを行う上で必要不可欠な条件は、友達だろうが彼氏であろうが肉親以外の何者でも。

それが男性ならば玄関から敷居を踏ませないということのみである。

茫然とコーヒー代とともに捨て置かれたありさの友人の顔を思い出す。

3人目ということに固く注意したつもりであったが、逐一論破された彼女はアキの信用足るに満たない存在だったらしい。憤慨メールか何かが届いたのか、ありさは携帯画面をしかめながら見つともすぐに何でも無い顔になって鞆に投げ込む。

「あたしの勝手ですから付き合うけど、どうしようもなくなるのはアキだからね」

「なりません。責任とって」

「そう言いつつもあたしに対して友達のフォローだ何だと面倒増やして悪いなと思いつながら、海老フライしてくれるアキが好き」

「……フライね」

「うふふー」

甘えているのはお互い様なのだ。

けれど、新しい場所に居を移しても。

アキはどうにも変わることのなかった嫌悪感を、やはり拭い去ることが出来なかった。

態度は悪いが、話すことが可能になったただけでも上手くいつている方で。

それを理解しながらもあえて口をすっぱく注意するのがありさの役目であり。事情である。

どれだけお互い解り合っている、互いが互いの人生に真っ直ぐであるのは本場で。

赤の他人でも、互いにその人生を応援したい心情であるのも本当なのだ。



「もうさ、荒治療として男と同居すれば？」

「絶対許さないし間違っても起きないし、冗談でもやめて」

腕を絡めて道筋を商店街へ移すありさに引つ張られつつ。

親友の未恐ろしい発言にまた鳥肌が立ちながら、今晚は彼女の苦手なナスを副菜にとアキは心中決めたのだった。

（まさか夢じゃなく現実で事が起こるだなんて、…）

喧騒の中、押し黙ったままの対男性には目つきの悪いと自覚する自分の前で。

未だ去ることもなく笑みを浮かべたまま、彼の男は突っ立っている。

むざむざチラシを取ってやって来たということは………

（なんだろう、悪寒が走る。話なんて聞きたくない）

けれど無情にも対面する人物は口を開く。

「秋本さんで良いよね？俺、同じ経済学科の福本ゼミで、くおさかわたる久尾坂渡ね」

「はあ……」

服装は、それほどちゃらちゃらしてはいない。

黒と白しか使わず、さもそれが大人のファッションだと思う勘違いでもない。

靴先も怪獣の爪のように尖ってはいない。

ミニタリー系の半袖ジャケットと白い七分の重ね着。パンツはチャコールブラウン。ショート丈のラファウトブーツと合わせている。二十歳そこらであれば悪くない服装であり、ハイトーンのカ髪と似合っている。

人好きの良さそうな笑顔であり、女子にも男子にも人気のありそうなやんちゃ系統か。

顔は街角で読者モデルを依頼されるほどには整っているだろう。雰囲気の高さと対照に、物腰や話し方は年の割に落ち着いて見える。笑みの雰囲気がありさに似ていること以外、特に興味を抱かなかったが。

「それで、そのチラシが何の用？」

「用があるのは俺なんだけど……まあ良いや」

「（良くはないけど）何か言われた？誤字脱字はないはずだし、きちんと手続きとって張り出したけど」

「え？ ルームシェアの募集、かけてるんだよね」

「気付いてなかったんならよく読んで。募集しているのは、女・子・だ・けなんだけど。貴方性別は？」

「見て解らなかつたんなら失礼。正真正銘日本男児です」

「その男児が、女子しか募集していない私に、いったい何の御用でしようかしら？」

「うつわすつごい丁寧口調が壁を感じる…」

眉をひそめた笑みだが、それほど困っている感じは伝わってこない。

やんわりと見えながらもものつけから喧嘩腰に取られても仕方のない言葉の応酬を重ねてみて。

外見からは存外見えないが、言葉尻で相手を読めるタイプなのだとわかった。

つつけんどった態度のアキに対しても普段寄ってくるような人間ではなさそうで、落ち着いてこちらに應對している。

印象、面倒くさそうなタイプに変更。

立ちっぱなしの彼が理由か、不穩の空氣が周囲に伝染しているのか、若干視線が集まってきている。

(…早く終わらせて此処から出よう)

先手をとって看破すれば二度と近づこうとは思われないだろうと、一息吐いて氣を入れる。

「貴方がどういふつもりで話しかけてきたか知らないけど、私は男とルームシェアするつもりは全くないわ」

「そんなに男嫌いなんだ」

明日の天氣は雨。へえ、と。

まるで世間話の一環のように、あまりにも雰囲氣が軽く流された事

に少し気が抜けた。  
知っていて話しかけたのならば、いったいどういう神経をしているのか疑いたい。

入学当初は自分で振り返っても散々で、声をかけられるだけで威嚇していたようなものだ。

今ではそれなりの対応が心がけられるが、知り合いはいても共に遊ぶことなど論外。

ゼミの懇親会でもどうしても参加が必要な飲み会以外は避けて通っている。

軽い気持ちのナンパも徹底無視してのけて、ゼミの女子に合コンに誘われようと付き合ったことはないのでゼミ内ではわりかし知られていることだが。顔も名前も知らない人間から言われる程知られているのは少し場合がよくない。

悪目立ちしたくないから堪えての愛想なしで留めている地味女なのに。

思わぬ所で知った噂の広がり、余計顔をしかめることとなった。

そんな苦い表情の自分と正反対に、にこにこ微笑んだ彼はクイツと口元を上げた。  
途端。

「性別は男。趣味はUFOキャッチャー漁りと酒に合うつまみ探求で料理もわりと出来るよ。実家は寺で次男なんだけど、長男と歳離れてて実際一人っ子歴が長いからそれなりのことは出来るつもり。周りからは社交性あるとか友達多いとか言われるけど自分家に人は上げたくない派。好きな食べ物はシチューかな具はハウレン草と鶏モモが好きで持つてる資格は書道五段剣道三段空手黒帯でも喧嘩嫌

いの平和主義でサークルは飲みサーだけど都合つく時くらいしか参加しなくてバイトは今は本町んとこでウェ이터と塾講の掛け持ちで風呂は鳥の行水朝シャン派で、」

「~~~~~ちよ、ちよっと！いったい何を、」

最後の方はノンブレスの弾丸のように流れてゆくだけで、いきなりすることに頭の中を通り過ぎるだけだった。

慌てて遮れば、イケメン三割増しの笑顔で彼自身を指さし。  
のたまった。

「　　んで、男にしか興味のないヘテロセクシャル。所謂ホモね」  
「……………は？」

はい？

「男嫌いはともかくさ、女の子として身の安全は保障できるよ。危機感覚ることもない完璧安全牌だからいらぬ心配することもないし。あきちゃんにとってはかなりの優良物件とお薦め出来るよ」

「て訳で、どうぞ宜しく。あきちゃん」

ありさ。

あなたの言った冗談の種は、思わぬ変人の縁を引つ張り寄せたようです。

茫然と見つめれば、恥ずかしげもなくにこにこ見つめ返すとんでも人間。

喧騒が遠く感じるなかで、私は思わず現実逃避の道に走るのだった。

？【二度は考えて物を言うべし】（前書き）

視点移動 ワタル編（？補完）です。

人物の心情が伝わりやすいように沿った作りを試行錯誤しています。  
混乱させてしまうかもしれませんがお付き合い願います。

？【二度は考えて物を言うべし】

肌寒い季節が通り過ぎ、穏やかな日差しの暖かな日々がやってきた。

駅から徒歩10分。

我が大学は理工学部・建築学部・経済学部・文学部・社会科学部など、理文含めて幅広い学部が売りの私立大学である。

立地と言えば都会に近くも土地の広さを求め丘の上にあることから、幾分離れてはいる。けれど30分圏内で街中へと移動できるため、生徒には不便を感じさせるほどのことはない。

大学内の施設も研究施設から蔵書の幅広さが評判の図書館、点にする食堂のリーズナブルさに改築を重ねたとは言え近代的な修学施設と私立としてはまあまあの充足感で大学ライフを送れると人気の学校である。

ただし心臓破りの坂と呼び名の傾斜の坂が唯一のネックであり、徒歩での遅刻によるスピードダッシュは受験疲れで衰えた学生にとってはきついものだった。

また、道路を挟んで向かいに位置する美術大学は華の宝庫と名高く。一躍センスが高い美女が多いと近辺では知られているので、男子学生的に出会いの幅は広がり夢が見られるという話である。

運命的な出会いを夢見る程幼くはないが、目の保養には確かなので合コンに精を出す男子諸君を馬鹿にする気はない。



誘われて暇であれば顔を出し、狭き門をくぐり抜けた彼女・彼らは話す分に面白い性質であり。  
ワタルとしても社会勉強の一環として、友達付き合いを重ねていたのだった。

春学期が始まって一週目のある日。

見事希望のゼミに合格を果たし、顔合わせという名の食事会を経て顔見知りが増えた。

新たに知り合った女子生徒に請われるままバイト先を教えれば、昨日ウエイター姿をからかわれにやってきたのを苦笑して相手にした。

ここ最近とある理由により心身ともに疲労が蓄積していた身として、ああいうのは勘弁してほしいものだが。折角やって来た友人に当たる訳にもいかず、その結果より気疲れ分がたまった。

まとまった睡眠もとれぬまま講義に顔を出し、いつの間にか船を漕いでいた肩を友人に揺すぶられて気付き。

昼食の誘いに伴立って移動しつつ話に華を咲かす。

情報誌の話題がどうだとか、駅前の短大のどの子が可愛いとか、ありきたりの話題。

その最中ふと目を引いた、学生専用の校内掲示板に張られた用紙をつい立ち止ってまじまじと眺めた。

埋めつくされるように張られたサークルの勧誘ビラの文句の中で、一際魅かれた理由はその大々的に訴えられた“急募”と“ルームシェア”という言葉だ。

今時の女子大生が書くような丸っこい文字ではなく、線が細いながらも字体の整った清廉な字。

端的に書かれた物件情報に、シェア条件。間取りと周辺の情報などなど必要とわかる情報がちゃんとまとめられてわかりやすい。また女子アピールの無駄なキャラ絵やマークが一切なく、不動産のビラのようにスッキリしていながらも受け取る方が理解しやすいようきを回されていた。

女性のみ募集と条件づけていることから、連絡先の秋本という名字の人物は女性であるに違いないのだろうと知る。

こんな講義が始まって1週間と微妙に入った時期にこんなものがあるのだろうから、急募というからに突然のことだったのだろうか。

「…この秋本って、あの秋本かな」

いつの間にか食い入るようにチラシを見ていた自分の背後から、顔を出して眺めた友人こと唐沢亮一が意味深に告げる。

同ゼミで興味分野も似たり寄ったりなため、よく共に過ごしている仲間内の一人である。

肩越しに振り返って見れば、思案気に同じくチラシを見ていた。

「この子、有名なのか？」

「有名っちゃ有名。可愛い顔して寄ってくる男を千切っては投げ千切っては投げて無関心を突き通す、通称“黎大のモーゼの十戒”」

「ずいぶんゴテゴテのあだ名だな」  
思わず苦笑する。他人様の話題には皆飛びつくものなのだなあと  
言わずに胸中に留める。

亮一は気安い性格で男女関係なく付き合いやすいのだが、思わず  
女子かと言いたくなるくらいに耳年増で大学内の話に精通している。  
女性に対し大学生二年目になっても幻想を捨てきれない性分である  
ため、潰えたお付き合いは片手を超えたいらしい。

「ほんとさあ、男だけ親の敵みたいに見られんの。入学当初のサー  
クル勧誘じゃこぞって狙われたらしいけど、絶対一步分の距離には  
入れさせなかったらしいし。無理に入ろうとしたら目吊り上げて逃  
げられて、遠目からでも避けられ続けるって」

男子高育ちゆえに現実を認めたくないのか女子の負の面を目の当  
たりにしても何のそのという性格だ。  
男であるだけで目の敵にされるその子が理解に難しいのか、眉根  
を寄せて首を傾げていた。

「パーソナルスペースに興味半分で無理矢理入る方がおかしいだろ、  
ふざけてやったにしろ謝罪して良いくらいのことだと思っけど」  
「弄り倒そうとしたら公衆の面前でこき下ろされたらしいし」  
「我が強いな。クールじゃん」

「人付き合い苦手でよく一人でいるけど、同性にはそれほど嫌われてないみたいだし。良い子っちゃ良い子なんだろうな」

「ふーん。性格に問題ないカワイ子ちゃんでも、鋼の男嫌いか」

「あと、又聞きしたのだとその美大の柏谷ちゃんと仲良いらしい」

「柏谷？つてあのモデル風美人さん？」

柏谷ありさと言えば、入学当初からこの一年話題に上がり続ける近辺の学校で美人と命題される女子生徒である。

頭の中から足先まで整った八頭身のパーフェクトパーツが目立つ、伸び伸びとした性格で誰に対してもフレンドリー。

美醜云々の話題は良くも悪くも昇っては立ち消えやすいというのに、我が大学では日々懸想する男（少数派で女も）は絶えないとか何か。

毛先にかけて重いウェーブののった栗色の髪 of 美人さん。服のセンスも良くて、学校でも交友の広い人物らしい。

そんな人物が、知らぬ間に話題となっていた人間と仲が良いとは。ますます以てその秋本という子に興味が湧くというものである。

「なあ、その秋本つて子の顔わかる？」

「ん？そりゃわかるよ、同じ学部だし」

「そうなんだ、こりゃチャンスだ」

けらけら笑いながら、その手の込んだチラシを丁寧に掲示板から剥がして言った。

背後で正反対に重苦しいため息を吐いてみせた友人は、そんなワタルを不気味そうに見ていた。

「…ワタルさ、パーソナルスペースの侵害がどうか言いながらやるうとしてること、結局同じじゃないのか？」

「部屋に困ってるのは事実。それに、とっかかりくらい作っても良いだろ？本気で嫌がられて仲良くなれないなら近付かないさ」

「……………もし仮に、マジでシェア出来たなら焼き肉奢ってやるわ」

「マジか。言質とったぞ」

「安全域なのは確かだけどなあ」

精々頑張れ〜と気の抜けた応援を亮一に貰いながら、所詮無理だと見られたのをどう打開してやろうかと思う。

周りの女友達と一風変わったらしい子。

普通に話せるものなら、きっと自分にとって気楽な子だろうと思う。

久々にわくわくする話題であるので、自然笑みが浮かんでくる。

隣りでその様を見ていた彼は、変な導火線に火がついたと横目に見るばかり。

だから、思わず。

「もしかしてカレシと上手いかない腹いせ？」

「そんなどっちにも失礼なことしませんから」

いらぬ一言を発した隣人をジロリと横目にする。

普段明るく能気な顔と評される自分がぶすつと睨んでくるのは、やはり思うところがあるらしい。

自然と彼の背筋が少し張りつめたのが見てとれ、眉を寄せて悪い悪いと謝意を重ねられた。

口の慎めぬ友人とチラシ一枚とともに、今なら昼食と摂っているかもとの情報にワタルは当の目的である食堂へ足を急がせる。

別に可愛かろうが素朴だろうが顔の美醜の点はどうあってもいいのだ。

ワタル自身にとっては、そういった垣根さえ関係ないと言い張れる根幹の部分が世間一般とは異なるのだから。

（いい加減、ユキに鬱陶しく見られるのもつらいからなあ…）

憮然として無言に見続ける腐れ縁の顔を思い出して、陽気な亮一に知られぬようにため息を吐いて気を紛らわす。

養われた直観に従うのもありである、と気持ち軽く検討をつけて、行き交う人波の流れに乗って、手元のチラシに目を落とした。

飢えた学生と忙しない調理場で賑やかな昼の食堂。

セルフサービスの食事片手に席をとって座れば、目ざとい亮一はすぐさま秋本なるチラシの主を発見してくれた。

肩を超えた辺りで切り揃えられた黒髪は無難に首元で一括りにされて、細くて陽に焼けていない白いうなじが見てとれる。

肉付きの薄そうな背中中はピンと張っていて、姿勢の良さに好感が持てた。

武道を習っていたこともあって、どうも最近の視線を集める系の女の子がする仕草から凝り固まったような撫で肩だとか重心のズレだとかが、変に気にかかるのだ。

歳の若い女性ならではの、小首を傾げたり胴体を反らす仕草は小動物のように可愛いらしいのだろう。

けれど身体に無理な不可をかけてまで異性に訴えることかと考えてしまう。

特に口に出したことはない点だけれど、ワタルが思う“秋本さん像”として興味がより魅かれた事実となった。

多人数対面の大机ではなく、窓際に面した個人席に一人友人らし

き人物もなしにかけており。

時折窓の外の景観を眺めながらゆっくり食事中らしかった。

この食堂は窓の外の植え込みと道路を挟んで、隣りの美大に面する造りになっている。

端に位置することや大学に関係のない門外漢も気軽に訪れる仕様になっているため、時折その美大生らしき集まりや周辺に住む主婦たちが食事に来ている場面も目にするところがある。

そんな彼女は、喧騒の中大衆の意気に気詰まりせず、身を縮こまらせることなく。

ただもくもくと腕を動かしては、道路脇を歩く人影を見ているようだった。

観察しながらワタルも食事を進め、正面に座る亮一の、秋本なる人物の所属するゼミの友人から聞いた噂話を又聞きした。

生まれはこの都市部から電車を乗り継いで2時間圏内の、幾分賑やかな郊外地区で（どうでもいい）。

兄弟はおらず一人娘（一人っ子にしては自律したものだと思う）。時折柏谷ありさと一緒にいる所を見かけるとのことに、あっさり中学からの友人だと判明（へえ、と呟くと反応が薄いと睨まれた。だってあまり興味がない）。

顔立ちは整っており、つんと上がった唇に、少し目尻の上がつたくりりとした茶色がちな黒目は愛嬌があるがそれを見れるのは稀だそう。



艶のある柔らかな髪質の黒髪だがヤマトナデシコなるものではなく。ゼミが同じでふざけて告白もどきをした男を一月無視し続けた逸話持ちの腹持ちありの性格。

ゼミ内では教授の覚えめでたき真面目な生徒（プレゼンで下調べを重ねた論破に、これからが楽しみだと教授が称賛したとのこと）。1年目に大学が標準に沿って配置したゼミから、そのまま2年目も同教授ゼミに持ち上がりのまま師座するそうだ。

ゼミの女子内の評判は甲乙つけることでもなく。

我を張った高飛車な性格ではなくて、単に軽度の人見知りがある普通の女の子と認識されている。

件の男子生徒は本人が笑えぬ冗談を言った結果だとして全面的に彼女の味方。

女友達同士は付き合いの悪い彼女を飲み会に引つ張り込むのに、あの手この手と使って彼女を引き出そうとするくらいなそうで。

なんだ、とワタルは人称像に当たりをつけた。

「ふつーに良い子なんじゃん」

「……ちゃんと聞いてたか？」

途中から脱線してどこそこの男がこんな文句でフラれただ、やれあの先輩がひっきりなしに追いまわして輦轡をかつただのと知って得することのない話題は端から聞いていなかったたので、亮一を黙殺してワタルは続けた。

「おっとり口調で男の人と喋るの苦手ですーとかにこにこして嘔吐く訳でもなく、男嫌いだけど共学に通ってゼミの教授だって性差で選んではない。女友達に特別愛想まくまでもないけど気に入られてるし、一年経った今じゃ新生ゼミ内はつつがなく良好関係継続なんだろ。全然問題ない」

「そうだけど、噂になるくらいの男嫌いだぞ？端から男なんて除外なんて思われてんだぞ？」

「飲み会で男友達と世間話くらいは出来るんだから、寄って叩く陰険な誇張話じゃないの？傷害罪で訴えられた訳でもなしに」

「俺ワタルくんの見解に圧倒」

なまじ飲み会で女子アピールに吞まれたこともあるだけに、友人はワタルの考えになるほどーなどと零している。

しかしこうは言っていない、この男はその性格ゆえに肉食系と世に言われる女性陣に吞まれるのだろうと頭の隅で思った。

頭ごなしに亮一の女性観を否定するほどワタルも自らを出来た人間とは思っていないのでケチはつけないが、無自覚の強かさが彼にはあるので想像は放っておく。余計なお世話だろう、と。

「うん。友達になれそうなタイプだ」

「…そりゃ、ワタルは垣根なく飛び込んじゃえる羨ましい性格だけだよ」

「亮一だってそうだよ」

「俺はお前の社交術を見よう見まねしてたら性分に合っただけ。お前より素直とは思っけど」

それは自分が腹に一物飼っていると暗に言っているのに等しい言い方と表情だったので、ワタルはうん？と語尾を上げて笑って見せた。

案の定冷や汗をかいて何にもないです、と固い笑みが返ってくる。

全く失礼なことである。

自覚無自覚どう違えど、裏表使い分けるのは人間の本質だ。世にはその表裏が紙一重な人物もいるだろうが、今は問題ではない。

すっかり食べきった食器を前にごちそうさま、と手のひらを重ね合わせ。

机上に置いたままのチラシをちらりと見やる。

黒の印字で、左下の隅に存在を誇大することもなくただ在る綺麗な字面。

幼い頃通っていた実家近くの習字の先生が朱色で花丸をくれそうなお手本ものよりは柔らかい筆跡。

字からも、後ろ姿からも。

感じ取れるのは、婉曲することなくただ真っ直ぐな性分であるとだけ。

一年目は存在こそ知らなかったが、新しい交友関係を築ける人間ではなかるうかと思うと久方ぶりにわくわくする。

これまではわが身の事情で精一杯だったけれど、生活を新たにした  
此処での一年は充実していたのだから。

今さら女だ男だ性別云々かんぬんという考えてもどうにもならない  
問題は、ワタルにとって背後の振り返った先である。

（同族とまではいかないけど、所縁があるのは事実なんだ）

カタン、と椅子を押して立ち上がったワタルに浮かぶ笑みを悟り。  
亮一は呆れ気味に、茶を飲みながら口を開いた。

「俺、秋本さんが可哀想に思えてきた」

「ただ見目が良いってだけで突撃する輩よか、性根に素直な俺の方  
が人畜無害」

遠巻きにちらりと彼女に視線を向けながら歓談するあちこちの男  
たちを見て笑みを深めれば、ワタルほど二面性が読みにくいのを無  
害とは言えないと小言がくる。

そんな奴と毎度毎度連れ歩く亮一こそよくわからないけど俺は楽し  
いぞ、と返せばとつと行けとばかりに手が振られる。

「骨は雪弥と拾ってやる」

「俺が埋まるのは実家だけだから」

「…蝋燭線香代わりに束ねて燃すぞ」

「新築の境内プレゼントなんて友達思いな奴だなあ」

「黙って行けっつの！」

ささやかな友情を確かめ合って後ろ手に、件の彼女へと一歩一歩近づいてゆく。

曇りガラスで顔はわからないけれど。きっと、噂を呼ぶほどには可愛らしいんだと思う。

特に気になった点ではないが、顔を見合わせて話したい。ただそれだけの欲求。

（あわよくば、家賃光熱費折半7万5千のセパレート好物件が手に入るかも）

日々放り出したままの問題に着手すべきは己の方で、ベクトル違いの同族染みた興味本位が本音で掻き入って良い訳ではないと解つては。いるが。

（何か、縁感じるんだもんなあ）

通路の邪魔にならないよう机に身を寄せて。  
彼女との距離は話すに難くない2歩分の位置。

ふっと過ぎた人影に彼女がこちらを仰いできたのをにっこり笑  
って、チラシを掲げる。

「秋本さんだよな。                      このルームシェア募集を見て来たんだけ  
ど、話良いかな？」

声をかけ、目が合った矢先のげんなりした顔と、宙に止まった箸。  
固まったその表情が、思わず腐れ縁を思い出させて笑いたくなる。

(…これは、話違わず難度が高い)

剣呑な雰囲気を感じしもせずに眉間に皺根を寄せる親友と同属だと  
判断をつけ。

チラシをぴらぴら揺らしつつ、初手に挑むつもりで笑みを浮かべる。

（ 仲良くなれる。ユキも気に入るわ ）

大学二年目の春。これからが盛りである。

？【二度は考えて物を言うべし】（後書き）

おまけ【亮一：談】

（人畜無害、なあ…）

亮一にとって、ワタルは気兼ねなく付き合える仲間の一人であり。第一に入学式での隣席が初年度配置の同じゼミにいたというのだから、彼は大学入学後の初めての友人と言ってもいい存在なのだ。本人はどう思っているかはわからないけれど。

（そりゃ知り合って1年しか経ってないけど、あの笑いを人畜無害と思えるほどには目腐ってない訳だし）

頭を占める当の人物は、噂の花形の傍でにこにこ無害と謂われのつく笑みで立っている。

己が入学後、縁のなかった同年の女性への振る舞いとして、ワタルを真似たのは事実である。

そういった内情に変に敏い彼のおかげで、表立って相談することもなく所々で見られる気遣いを他所で実践することで華々しく大学デビューを飾ったのだが。それは今はいい。

しかし、まさか同年齢といえどその世慣れて見えた男がビックリ箱的なネタをカミングアウトした時。思わず、『高校ん時あったなそんなこともー』と歯牙にも欠けず言い放った故に、初めてワタルの大爆笑が見れた要因となったのは内心自慢である。

常に笑みを浮かべる印象だが彼の爆笑はわりとレアだ。笑いの種に



なったとはいえ、事情ゆえか世間を斜めに見ている彼が同年代の男らしくなった起爆剤と思えば安くないと亮一は考えている。

（あの雪弥と一緒にになって大物がいたと言われたけど、あいつらしくに聞いてくれないしなあ）

あいつらと一括りにした2人以外のつるみ仲間の同輩の顔を思い浮かべつつ、話題が話題だけに他所で明るみに出来ないし。する気もないのだが。

（あいつもある種の噂の的だけど、その点は大っぴらになって本人があの様だし）

友人が落とした爆弾発言に、無愛想で喧嘩腰だった彼女もあまりの突飛さに茫然としていた。  
なんととはなしに同調したい心地である。

（…一回、あの切り込み隊長的な笑みが墜落した所を見たいと思うあたり俺も、大概毒されたもんだわな…）

公共の場で陥落した発言による静まり返ったフロア内の一部。

亮一は、これから大学中を回るであろう噂の的を横目にしながら。  
茶を啜って呑気に眺めるのだった。

？【春三昧と嵐の目】

「どこどこ？？？男は敵と貶して名高い女に言い寄ってきた噂の変人は」

栗色のハーフアップにした髪を揺らしながら、肩掛けのバカに大きい帆布地の頑丈な鞆をドンつと机に乗せ。

きよろきよろ辺りを窺い見る、問題の渦中に在るはずの人物が面白半分に目を輝かせているのを腹立たしくアキは睨み。

目立つと自認する華やかな彼女の腕を引っ張って座らせ、重いため息を吐くのだった。

とんでもない話題をその当人から投げ込まれ。関わらざるをえない状況にされた、あの日。

例え自慢にならない経験を踏んだといえど、アキ自身は平和でありふれた生活に身を寄せる唯の二十歳間際の女であつて。

突然、顔見知りでも何でもない初めて会つた男から。自分は女ではなく男が好きだとカミングアウトされて。

頭は大丈夫かと、呆氣にとられない方が可笑しいだろう。

もしくは日々度肝を抜かれて突拍子もない人生経験を踏まえる大層な御仁なら、その意見は適用されまいが。

類を見ずアキ自身も数十秒カチン…と、固まるしかなかった。

幾度も幾度も頭の中で言われた言葉を反芻し。意味をかみ砕き。何かの間違いか？とこちらを見続ける男を凝視し続けては自分のなかの常識と照らし合わせ。

視界を何度も過ぎる紙にようやく我を取り戻し。

とりあえずその理論はおかしい、と一言告げた。

「いくら貴方が男が好きだからって、それは彼女候補になりたくもない私が汲む所じゃないし。ていうか貴方のこと今日初めて知つたし。性別で差別してしまうのは、申し訳ないけど事実だし。襲われなかつと性欲の対象外であるうと、貴方が私の嫌いな男性である事実は覆らない」

だからごめんなさい、と目礼していつの間にか動きの止まったチラシを返してもらうべく掴む。

掴むが、思いのほか力が強くて抜き取れない。

細身なわりに力があるようだ、余計なことまで思い出してしまふ事柄に思考を掠めそう。

慌てて目の前の男にピントを合わせるべくアキは男を仰ぎ見た。

ぶっ、

見た途端。 気の抜けた音がして。

「……どこに、笑う原因があったの？」

くつつつ噴き出す笑いを押し込めるように上半身を折り曲げながら。

それでも収まらないのか、身体を小刻みに揺らして声を堪える彼の姿があった。

器用にも、チラシに皺が入らない程度の絶妙な力加減のままであるから。

余力力を込めると力作の要旨が破れそうで、アキは思い切りがつかないでいた。

「……………」ごめつ…だって、そう、返ってくるとは思わなくて…、  
」

少しばかり浮いた顔を見れば、なんと目尻に涙まで浮かべている。アキはと言えば思いつきり面倒な心地でいるのに。何とも楽観的な男だと半眼でそう、とだけ冷たく返す。

この男は実際何が目的なのか疑問に思う。  
ただ部屋を探したければ、子供じゃないのだから不動産屋を巡れば良いのだ。

わざわざルームシェアで同居人が女なのを物珍しく見て声をかけてきたにしては、世間一般の価値観から外れて位置する性癖を公共の面前でひけらかすなどと冒険も良いところであるし。

昼時の学生食堂で言うくらいだから何かの冗談か、もしくはくだらない度胸試しか。

色々思惑を想像してみたが。

なんとなく。

アキには、この軽く見えて物腰の落ち着いた男が中身まで軽薄そうには見えなかった。

ふう、と吐息を一つして落ち着いたのか半身を上げた男は、スツール一席分を間に置いて腰掛けた。

(…チラシから手放せば良いのに)

幾分引つ張られる形で腕が伸びたまま、アキは内心首を傾げて相手の出方を待った。

お気に入り、温かな日差しが入り込む窓際では。色素の薄い彼の髪は少し眩しく煌めいていた。

いきなり笑ってごめんね、と前置きをして。

彼は困ったように片側だけ器用に眉をあげて口を開いた。

「あのね、住む所に困ってるのは本当なんだ。今まで住んでたところも実はシェアしてて、同居人と喧嘩して放り出されてさ。今は友達の家に住座ってる」

「…？仲直りできないの？」

「一方的にばっさり。連絡途絶えたわ家行っても居留守だわ腹立つわでここ半月最低な気分。そこまでされちゃこっちも謝るのは癪で居ない間に荷物だけ貸しコンテナに移して転々と。賃貸用に金溜めててバイトも休めず時間作れなくて、隙間にネットで部屋探そうにも手続きその他と取れる暇がない」

「……お金の事情は置いといて、家見つけれないのにバイト入れられるってちょっとひどくない？」

「新規オープンしたばっかの繁盛してる店に、知り合いの伝手で入

ったもんだから顔に泥塗りたくない。もう一月すれば楽になると思うんだけど、いくら友達だからって居続けるのも悪いし恐いし安眠出来ない……」

聞く限り、シェア相手が不義理過ぎる気がするが事は他人様の事情である。

話し続けては気落ちして暗い顔になる正面の人間に、初めて会ったのに思わず同情してしまう。

ずきずきと痛み出す頭を片手に、私も事情は事情なのだと切り替える。

絆されて住めば都の我が家を台無しにする訳にはいかないのだ。

「友達に、家探しを任せる訳にはいかないの？」

「……俺、言っただと思うけど自分家に誰かあげるのって人災に関わらない限りダメ。シェアはシェアで領域が分かれてるから納得出来るんだけど、家主が上げるの嫌がってるけど家探してねって人としてどうだろう、」

「……まあ、そこらへんの事情が理解できなくもないけど。切羽詰まってるなら頼むしかないんじゃないかしら」

「切羽詰まったら丁度よく掲示板にこれがあった訳なんですが」

「一先ず、シェア相手の先方と話をつけるのが先じゃない？中途半端なままじゃいられないでしょ」

「……原因が痴情のもつれなら話はわかるけど、俺には全く覚えがないんだ」

思わず振った話題に対して飛び出た単語にひくき、と口の端が引き攣った。

またつきり、と頭痛がひどくなる。

「……………相手、恋人？」

「うん。社会人。深夜業のバーテンだから思いつきし学生の俺と生活反転してんの。問題なく続いてたし本人とも気が合ったもんで枠超えた覚えもないし、本気で日中夜問題が掴めない」

(…なんで私、恋愛相談みたいな相手になってるんだろう)

話が転々と移って、感覚は麻痺していた。

性癖は本人たちが納得の上ならばそれで良い。

勝手に自分の人生なんだから謳歌すれば良いのだ。ホモだとかどうでもいい。

然したる問題は住居だが、暇がないという話も解らない訳ではない。

進学校として評判の女子高を経て奨学生で入学した身として、毎日の授業に気が抜けない真面目な毎日を送っているのだ。半分でも高い授業料を払ってもらって都会へ出てきたのに、手前勝手な理由で講義を休めない。

彼の話の内容は真実なのだろう。

距離が身近になった分と陽が差して明るい分、疲労感と不眠による隈と頬から細い顎へのラインが若干窪みつつあるのが窺い知れた。



症状は軽くても、わが身にも身に覚えがある状態だった。

世間が思うほど広くないということを、アキは知っている。

そして自分が、ある種こういう“放っておけないタイプ”に極端に甘いこともアキは自覚済みである。

何を隠そう親友のありさが良い例なもので、いくらバイタリティ溢れるうら若き元気な世代といえど食べるものを食べねば活力は衰えてゆくのだ。

安眠出来ない環境が辛いものとはわかるし、友達といえども遠慮しながらの生活を理由分からず追い出され強いられれば、不憫と言うに他ない。

ルームシェア一年目当初は、入って間もなく課題に追われるありさがやつれるのが嫌でかなり無理矢理言い聞かせた覚えがある。

少しくらい無理しても平気だと言って忙しいせに働くと言う彼女と軽く喧嘩した覚えもあれば、熱を出して倒れた姿にぞらみると言うて顰蹙をかった覚えもある。

今では朝昼晩と栄養の摂れた食事提供を踏まえ健康体になった彼女が生活習慣を正すことに納得して、あの頃は若かったーと冗談紛いに言える程に落ち着いたけれど。

アキはあまりありさの食生活が信用ならないので、彼女に似た天真爛漫な母親代わりに頻繁に家に呼び寄せるつもりでいる。

そんな訳で、食生活のバランスはとまかく三食食べてきちんと休むという基本生活が送れない彼にはぐらり、と芯が揺れてしまうのも仕方なかった。

そこまで考えた所でふと、チラシを掴む彼の手に目を向ける。

骨が浮いた甲は硬そうで、力強そうな手だった。

アキの手なんてすっぽり片手で包めそうな、大きな手のひら。

水仕事なのか指先は荒れて、スクエア型に整ってはいるけれどささくれが見える爪先。

全体的に細いけれど、関節は太く、何か運動していたことを思わせる。

そんな、男性の手。

ガシリと骨が軋むくらい掴まれる腕。

物を投げるように簡単に吹き飛ばされる、あがらうことが出来ない力の差。

背後から迫る太い腕。後頭部に押しつけられる硬い掌。

「あきちゃん？」

ぞわりと首筋が震えて、反射で首を上げれば。

陽だまりの中で、不思議そうに佇む男がいた。

（ ああ、違う。ちがう。ちがう ）

明るい。

人の気配がある。

声がある。

一人ではない。

私はもう、何も知らない訳じゃない。

息を吸って、吐いて。また吸って、吐いて。

深く、けれど落ち着いて。繰り返す。

大丈夫なのだと暗示をかけるように瞼を閉じ、脳裏の影を払い落す。

目を開いた時、どこか神妙そうな顔つきになった彼は。

向き合っていた身体を少しずつ私から視線を外した。

何を思ったからか、わからないけれど。

その行為が、少し有り難かった。

しばらく無言のまま、ただ喧騒を聞いていたけれど。

器に残ったままの麺が延びてしまったのを横目に、努めて平常に声を出す。

「…悪いけど、やっぱり男と一緒に暮らすのは、私には無理」

ただそれだけの言葉に、とても労力を使った気分がした。  
対する彼は少し残念そうに視線を床へ落として、アキに向かって軽く微笑んだ。

「分かった。断られたんだから、仕方ないね。諦めて自分で何とかするよ」

気にすることもないと思うけど、気にしないでねと一言添えて。  
正面からその温かそうな笑みを受け止めることが出来なくて、少し視線を合わせてすぐにそらし、こくりと頷く。

未だお互い握り合ったままだったチラシの内、片側から手が外されて。

自然とアキの手はその紙一枚を片手に、力なく下ろされた。

手元に返ってきたチラシは、自分の触れた側だけが無造作に皺が入ってしまったていて。

何とも半端に見苦しい様が、喉元を悶えさせた。  
新しいものを用意するのも時間がないし、コピーすればマシかと気を遣う。

「ねえ、あきちゃん」

まるで聞かすつもりがないような小声で。けれどしっかり耳に届く低音は、穏やかな響きで。

老成した人間が浮かべるような、距離を置いて年若を見守ってくれる柔らかな繭の如き笑みを浮かべて。

彼は、眦を緩めて告げた。

「もし、良ければ。顔を見かけたら、挨拶くらいはするようにしても構わない？」

何とも、不思議な男だとアキは思った。

今まで此処にくる前からというものの、寄ってくるのはこちらを顧みず体面から汲もうとしない輩ばかりで。

相対して少し言葉を交わせばわかるものを、よくよく自分に都合が良いようにしかとらない人間ばかりだった。

ムキになるからいけないのだと親友から苦言を施されたから、間を置いて落ち着いて対応していたら軟化したあの茶化すばかりで。

結局は無視という一手に尽きるしかなかった。

それでも一年此処で過ごし、程度が掴めるようになっても自分の応対は手厳しいのだろう。

愛想がないのは自覚済みだし、関わろうとする土台が下心か単なる興味本位にしかとれなかった。

わかりやすく線を引いてみれば、よくよく身近にいた男は当たり障りなく触れる程度で。

事実楽だった。

けれど。

(…かなり、喧々と相手してたのに、なあ……)

いつまでもその状態でいけないのは、言われずとも己が一番理解している。

ありさが言うことも一々尤もで、反論してもそれは単に対応なのだ。ああ言えばこう言うという、彼女と自分の間での執り成し。

影を怯える自分を理解しながら、前進するように背を押してくれ  
た、血の繋がりもない彼女。

いつか終わりがくる。共にいつまでも、在れる訳がないのだと。

知ってはいたけれど、ずっとずっと先のことだと思っていたのだ。

それでも、震えてしまうから。

陽の下に在ろうと、あの影はいつもいつまでも、自分に付きまとうから。

(…これだけ、変わった人となら。……平気かな、)

男嫌いとしりながら近づいてきて、普通は隠すことを全面的に話聞かせてくれた、変わった人。

こちらの内情がわかる訳もないのに、許容できるぎりぎりのラインを押さえて、踏み込んできた人。

(…いきなり電話番号聞こうって訳じゃないんだから、よっぽどマシよね)

今度は視線を反らすことなく、泰然と見つめてくる髪色のわりに濃い茶かった瞳。

見返して、何故か思わず苦笑してしまった。

「久尾坂くん、だっけ？」

「ワタルで良いよ、微妙に呼びにくいでしょ」

飾り気なく、コウサカーとか聞こえるから自分じゃないみたいなんだと彼も苦笑した。

初めの勢いと打って変わって、どこか伸び伸びしている姿に此方が素なのかもと感じる。

「男だつてことは弁えてるから、そんじょそこらのやんちゃと同じ対応は悲しいのでお願いします」

「挨拶くらいでしょ？」

どこか反発したくなる言い方に、こんな簡単な“お願い”をされたことは初めてだと気付いた。

どうにも変わった男で、思わず吞まれた気がする。

こちらの内情を察することもなく、彼は圧迫感のない素直そうな笑顔を浮かべて言った。

「あきちゃん呼び、構わない？」

「名字だしあだ名みたいなものだし、ふざけて連呼されなければどうぞ」

「光悦至極有り難く」

「何その仰々しさ」

「寺の息子はお行儀良いのさ」

ぽんぽん打っては響くような言葉の返しに、やはり親友に似たタ  
イプだと内心頷く。



どつと疲れた気分だけれど、何とも言いにくい収穫があつて。  
その代わりに胸中に宿った、彼の事情に対する申し訳なささがどう  
にもしこりのように残ったのを無視して過ごし。

その日を終えたのだつた。

あれから3日後。

アキの機敏に敏いありさの猛攻に合い、白状した所何故すぐに教えないのかと喚かれて。

翌日は月曜だから何が何でもその好青年の顔を拝んでやるのだと息巻いて、食堂での約束を取り付けられた。

約束を無視すれば、それ相応の見返りがくることは知っているため無碍には出来ずにこの無駄に派手な親友と並んでいる始末。

いくら大学内の話題に疎いと言えど、この一年で何十人もの学生や社会人がありさに当たって碎けた様はアキが一番知っている。

学生は黎大を言わずもがな、美大でも駅前短大でも。

果てには都市部にある公立の人間がわざわざアタックしに来たことも知っている。

結果は言うまでもなく。ありさは歯牙にも欠けず今は課題と友情で手一杯と言つてはごめんなさい。

何人かとは出かけたが、肩をぐりぐり回しながら親父臭く帰還しては『お勤めから帰ってきたぞー』と雪崩れかかってきたのでお眼鏡に適った者はいなかった。

服だ小物だのセンスが合わないとか、あの店のチョイスは間違っているだのと事細かに話してくるので諸事情は筒抜けである。

男性がこぞって魅了されるのも分かりやすい容姿であるため、納得は納得だが。

賑わった館内で注目されるのを避けてきたのに、昼時じゃないと出くわさないでしょ！と訴えを通して。

2人窓際に横に一直列、いつもは夕暮れ時に少ない人数の中で利用する場所を陣取る羽目になった。

（視線が刺さるくらいって言葉ほど、ありさに合ってる言葉はないわ…）

座れば並んでアキにもああやっぱり、という視線。

ありがたければふらふらその後を追い、首を巡らせてアキを察して成程という視線。

気にしてちゃ生きていけないでしょ、と呆気からんと言ってみせる親友は堂々と猥雑で込み入った食堂を歩いてプラスチックの湯のみ二客にお茶を酌んで帰ってきた。

それを待つて、アキは手早く作ってきたお弁当を幅広の机に並べて膳を渡す。

「~~~~うはー！花見ぶりのアキのお弁当」  
「~~~~つはー！花見ぶりのアキのお弁当」  
「~~~~うはー！花見ぶりのアキのお弁当」  
「~~~~つはー！花見ぶりのアキのお弁当」

箸と引き換えに渡されたお茶を端に置いて、明るい笑顔を振りまくありさに苦笑が零れる。

月曜に昼ご飯！と言われてからは、事細かにおかずの希望が挙げられたためほとんどがありさ好みの内容になっている。

いつものホウレン草の卵焼き、レンコンの歯ごたえがある鶏だんご甘酢和え、春雨と錦糸卵とキュウリのサラダ。

小鯛の照り焼き、菜の花のカラシ和え、タケノコとそら豆の蒸し煮洋風味。

手毬型のおにぎりの中身は鮭と人参菜の炒め物とオカカが少しずつ。近所の公園へお花見に行った時に出したおかずが大半であったため、気に入ったようだった。

まとまりに欠けるが、夜食用に惜しがるのを見越して変わり種をタッパーに入れてきてある。十分だろう。

「あ、この肉だんご中身違うじゃん。うまっ」

「前教えたやつにレンコン刻んで練っただけ。出来るよ」

「その練ってからの工程がいささか面倒ねー」

教えた際に陶芸みたいと笑って練って丸めると面白半分に遊んだくせに何を言うかと思っただけ、自然に流した。

朝はきちんと食べているらしいこと、一週間経ったにしろ自活出来るから余裕余裕と話す言葉に時々返して箸を進める。

あまり心配し過ぎることもないけれど、こうしてまた週一に昼を、週末に晩を過ごせば兆候は押さえられるだろうと考えて。新生ゼミの内容や課題の話をしながら食欲を満足させる。

いつもよりも人口密度が多いような気がする食堂内を、週明けで

多く見えるだけだと無理矢理納得させた。

曇りガラスは窓の反射を抑えるが、向こう側の歩く人間たちは透けて見えるのでこちらにありさがいようと気付かれない。

わざわざ覗きこまれることもないので向こう側の世界は平和である。ざわめいて所々に稀に聞こえる柏谷という名詞を聞かないふりして中身を片づければ、ぽんぽん隣りから肩をたたかれた。

「なに？もう良いの？」

「違うわよ。例のコウサカ？ワタルくん？」

「違う、久尾坂」

「まどろっこしいなあ、

で？彼いる？」

少なからず、このきよきよ後ろを振り向く動作もざわめきを高めるのに効果が出ているのだろうと当たりをつけ。

心持ち慎重に辺りを見回す。

見渡したフロア内は同じような学生で一杯で、3日前に見たとは言え同じ人相を探し当てるにはアキにとって苦行で。

嫌々ながらも当たり障りなく眺め、いないと判断付ける。

「今日は来てないみたい。もしかしたら此処じゃなくて西館の方がもね」

「ん、まあこんな広い学校ですぐ会えるとは思ってなかったけどさあ。ざんねーん」

しょぼくれたありさに食後のイチゴを出して勧めれば、わーいと礼を言われて2人で飲み合う。

「んでもさ、こんなところで普通に口に出すって勇気いるよー？」

大物が勘違い野郎かどっちかねえ、とありが足を組み替えながら言うのに同意する。

「誰が聞いてるかわかんない場所で、いくらあたしに訴えるためって言うても。驚いた」

「今でこそ団体とか表立ってきたけど、偏見は多いし。影でこそ人は生き生き言い合うもんだから、共学で私立であちこちからわんさかいるんな価値観集まるって言うても度胸持ちには違いはないわね」

「……うん、友達多そうなタイプだったし。底抜けに明るいかどうかはわかんなかったけど、人好きのする雰囲気の人だった」

「しかも初対面だけで懇切丁寧に事情までご披露してくれて、あげく恋愛相談みた会話……」

「あたしも麻痺して色々突っ込んで聞いちゃったけど、嫌々って風じゃなかったし。普通に相手好きなんだなーって思った」

「……うー、もうすっごい気になるわね。人生観とか語り合いたいわ」

スティックをかじかじ噛み締め、口惜しそうにありが唸るのに苦笑いする。

思い返せば昼休憩のわずかな時間だったけれど。

彼は惜しみなく事情を聴けば話してくれ、他人の自分にとっても心を砕いて接してくれた。

自分のことに対し重きを置かないのかと思えば、偏見による批判を受けてしまいかねない立場にいるのだから大変なことだったに違いないのだ。

話し終わった後、立ちあがって友人らしい人物と去る姿を目にしたけれど。

平手で軽く叩かれては蹴り返して笑い合う2人の反応を見るにつけ、深い交友関係にあるのだと感じた。

（私みたいにな、がちがちに凝り固まって毎日過ごすんじゃない。

陰口があっても、受け入れて伸び伸びしてそう）

あれだけオープンに初対面の人間に話したのだから、包み隠さず聞かれれば答えるのかもしれない。

彼にどんな噂が立っているか邪推するだけ無駄だが、いきなり事情に片足を突っ込まれたようなものなのだ。

表に出す気はないが、気になるものは気になる。

（あれだけ整った顔立ちだからモテるんだろうに、女の子断る時はちゃんと伝えるのかな。いつから男が好きだって気付いたんだろう。友達はそのさえ知って傍にいるんなら、そういう違いさえ通り越して一緒にいる魅力を知りあってなくちゃきつとあんな穏やかには笑ってられないはず…）

黙々と考え込んで答えを聞くにはやぶさかな問いばかりが頭に浮かぶ。

けれど、自分には彼の要求に応えられないのだ。あれ以上突っ込んで聞く氣になどなれない。

突飛な情報に煽られて、あの日のあの時間だけが特別だった。それだけだ。

「アキ？最後の食べて良い？」

覗きこんできたありさに何も考えず頷き返し、質問の意味を反芻して気付かれないよう息を吐く。

（ うゝ…ダメだわ、日常にないことだったから反応しがちなんだ。もう関係な…くはないけど、これ以上は考えるな。踏み込むな）

ありさが舌鼓を打って味覚を楽しんでいるのを横目に、空いた机の上に肘を付いて窓の向こうへ視線をやる。

今日も食堂を過ぎた正門まで、偶に波が途切れてもわんさかわんさか人が通る。

どの顔も同じようなものに見えて、そんな訳はないのにただ行き交うだけの流れをぼーっと眺める。

「ごちそうさま！次回は来週じゃなくて、その金曜日にしましょ」

「おそまつ様……って、本気で？」

「あつたり前じゃない。それまでに会ったらちゃんと挨拶返してア  
ドレスくらいはゲットしとくのよー」

「何で交換する必要あんのよ」

「今は春よ？麗らかな春、別れの後の出会いの春。そーんな徳の高  
そうな人の友人ならお知り合いになってみたいじゃない」

「顔教えたげるから自分で聞きなよ。嫌よ」

「せっかく奇特な人が挨拶しても良いかーなんて小学生でもしない  
断わり入れてまで仲良くしようとしてくれるのよ？その上イケメ  
ン？寺の息子？ありがたーいことでしょうが。しっかりお付き合  
い下さい」

「…タッパ―持って帰ろうかな…」

「ちよつとー！？ありさちゃんの素敵な肌がブツブツになっても良  
いって言うの？この薄情者！」

「もういい年で自活すんだから自己管理」

「ひどい！そんな子に育てた覚えはない！」

「産んでくれた覚えもないわ、」

コンコン、

言葉の応酬を重ねていけば、正面の窓が雑談の中で音を立てて揺  
れた。

（スズメ…？）



にしては力も強いし。何やら影が大きい。

思わず仰いで見ると。

「　　ッ！！！！」

「…お？ん？」

話題の中心人物が、曇り部分を超えた所から片手を振って見下ろしていた。

「っな、何で…！！」

「　　うん？うそ、マジで？」

先日初対面の、相手も思わず笑い返してしまう程にこやか・な笑顔を浮かべ。

少しばかり頬が上気しているのは、温かい外気と急こう配な坂を登ってきたからであろう。

薄手のアーミーグリーンのショート丈のモッズに、メッセンジャーバッグを横掛けにして。

日向の似合うハイトーンの茶髪を揺らしておはようと言に出した。

「……おい、超イケメンじゃん」  
「……」

いくら挨拶しあうと言っても、こんなド観衆の中で窓を挟んでやられるとは思わず。

騙されたかと訝しんでも素直そうな笑顔が返ってくるばかりで、アキは茫然と片肘付いたまま啞然とした。

見かねたありさが放置していたアキの右手を振るのとともにこりと笑い返して。

ワタルは、満足したのか正門へと歩いて行った。

「……あれは面白いわ。無害そうな好青年ぽいけど、話聞く限り相当なタマね」

「……あたし今後は振りかえないわ、」

腕組みしてうんうん納得しているありさはともかく、背後で事態を見ていた衆人観衆は好奇心な視線でこちらをひっきりなしに見ていると感じた。

弁えていると言ったのは戯れだったのか。

よくよく何を考えているのかわからなくなる。

「まあ、あんまり難しく考えなさんな。単に目に付いたからーってだけでしょ。アキには珍しくてもこんなの案外普通なんだから」

「それをありが隣りにいる状態でやるかって話になるのよ…」

「これくらい何よ。車で通り過ぎながら名指しで愛語ってくる馬鹿よりよっぽどマシじゃない」

「…それは土台の違う可笑しさでしょ…」

満腹感で少なからず至福な一時が。

一瞬で重いものを体内に抱えた気分で、頭を抱えるアキだった。

(…同情なんかで、決めなくてほんと良かった…)

？【女が四人集まれば何とやらで】（前書き）

会話が直接表現あります。

するつと読み進めちゃえば良いです。

？【女が四人集まれば何とやらで】

？【女が四人集まれば何とやらで】

「お、女前と噂になった男前の彼女。お話しない？」

「……その噂の出所詳しく」

「出所を絞めたところでもう遅いからおいでなさいな」

本日の講義を終えての帰り際、三階のカフェ前を通れば同ゼミで比較的親しい南吹耀子なすいようこに呼び止められ。

腕を引かれるまま半屋上に面した店内へ入った。

すいすいと席を分けて進む彼女の後ろを歩きつつ、ありさの提示した金曜日を控えた思わずため息を吐く。

ここ最近ため息ばかりで、華の女子大生が笑える…と卑屈に思うアキだった。

昼時の食堂での一幕を終え。

翌日にゼミがあつたため噂の真偽を女友達から聞かれた。

何やら学内ではある種有名な上に、お姉さま系の先輩方からお誘いの舞い込むイケメン具合で先輩後輩ならば誰しも知る人物が。

黎大のモーゼこと鉄板男嫌いのアキに誘いをかけた所ぶつた切られた、云々。

モーションを掛けたのが金曜だったことから土日を含み月曜はその真偽が問われながら流れたらしいが、その月曜に新たな噂が立ちあがった。

何と素モデルと謳われる美大の女子大生：柏谷ありさも微笑みかける進展具合で、実は良好？！さしては鉄壁は陥落か？！というお話。

耳疎くなるように噂話を釣ることもなく過ごしていたアキだが、何とも不十分な真実を帯びた話題に重いため息とやってらんないと一言呟き。

女友達はやっぱり杞憂だったわね〜と、教授の入室とともにあっさり散開したのだった。

毎度毎度学校に出る度に気が重くて、ゼミが終わってとつと下宿先に帰ってストレス発散として菓子を増産した。

しばらくの甘味の山に満足し、疲労感とともにぐっすり寝たけれど、やはり一度飛び交った噂からはしばらく逃げられないらしい。

セルフの売店でカフェオレを買い上げ、待っていてくれた耀子とともにテラス席へ向かう。

所々にいる女子生徒たちの話し声が、どうにも示唆されているようで変に勘ぐる自意識過剰な部分が居心地悪くさせる。

隅の席を摂っていた、かしまし娘と称される面子の残り2人を（もう一人は勿論耀子である）目にし。

どうせだからお菓子持ってくれば良かった、と頭の端で考えた。

「あれ？アキちゃんじゃん。よく会えたねえ」

「トイレの帰りに丁度前通りかかったの捕獲したの。褒めてっ・かわ・せ」

「私は天然記念物か」

「何様なのよあんた」

一人はのほほんとしたタイプのこはやしちぢ小林紗智、もう一人は少しきつい言い方もあるが美人で通る中島彩夏なかじまあやか。

アキを含めて4人とも、何の縁か1年度から同じゼミに配属されそのまま転属することもない持ちあがりの女友達である。

彩夏と耀子は面倒だからという理由だったけれど、交友関係は良好な間柄である。

席に付いて一息入れ、紗智が勧めてくれた某スティック型のチョコ菓子をぱりぱり拝借した。

「で？新たな噂の真偽はどうなのよアキ」

「半分以上はデマよ」

「その半分以上が気になるところよねえー」

「まさか久尾坂くんがね…」

物憂げに彩夏が遠くを眺めるため、ひよつとして少なからず好意を抱いていたのかと思わずアキはハツとした。

「彩夏？告白が嘘だからね？ぶった切った…ことには切ったけど、恋愛感情どうのこうのはあたし何ら関係ないから」

「そんなの彩ちゃんもわかってるわよねえ」

「え？」

「そうそ。どうせ前に言ってたルームシェアだかが関わってんでしょ？」

「さすが耀子ちゃん」

「じゃあ、彩夏何で？」

「…久尾坂くんは行動が読めなくてにこにこ笑ってるだけで煙に巻いてるっていう同年を排他した所が良いのよ。身近な所になったら妄想出来ないじゃない」

「……」

「相変わらずよくわからんわ、彩は」

「これが彩ちゃんだもん」

三者三様の反応を返したところ、彩夏も踏ん切りがついたのか丸テーブルに向き合って話に腰を入れた。

「まあ、ちよつと前から掲示板見てた奴ならアキが張ってた物件紹介状知ってるからさ。噂も判別出来るでしょうけど」

「この半端な時期に大変だねえ、アキちゃん」

「耀子が飛び入りで入っちゃえば？ご令嬢」

「私令嬢のポーズとってるだけでただの小企業の次女ですから。アキが期待させるようなこと言わない」

「私も実家通いだからなあ…ごめんねアキちゃん」

「ウチは一年契約毎だけでもう結んじやったしなあ、悪いねアキ」

「謝ってもらうことないよ。悪い…ていうか、ちよつとした相違なんだし」

気安い友人たちの言葉に気にしないで、と微笑んで見せれば笑い



かけられた。

「うーん…何とかしたげたいけど、こればかりはねえ」

「アキちゃん私たち以外ゼミの女子でもあんまり話せてないもんねえー」

「…ちよつと、あの辺のタイプは、時間がかかる…」

「分からんでもないわ。ごりっごりの押せ押せお嬢さんたちだもんねえ」

「寄れば男のネタ話ばつかだもんね。何のために四大入ったんだか」  
「それは言わないお約束うー」

新生：風見ゼミは経済学部の中でもわりかし社会現象や文化背景を題材に経済を研究することを主体にしており。

50に差しかった温和な雰囲気、風見教授は、2人の子持ちで家族の写真をこっそり携帯に保存している愛妻家だ。

若者文化に疎いとは言え、人気Jポップ歌手の振り付けで熱唱できるほどには部分的に固執している（奥さんがファンゆえ覚えたそうだ）。

雰囲気は柔らかくも、一度授業では妥協を許さない真摯さで中途半端な課題は即返却。再び違う課題を提出させてのける程には真面目に取り組んでいる教師である。

一回生の頃からその手腕に揉まれた4人はともかく、新たに入った残りの女生徒たちはてんやわんやなようで。

毎回化粧室で陰口を叩いているのを知っている。

叩くくらいならもつと楽なゼミへ行けば良かったのだと思うが、思うだけでアドバイスしようとは思わない。火に油である。

「それにさあ、梶原くん？一回の頃はそれほどでもなかったくせに、最近垢ぬけたからかあの辺にちやほやされる的になっててちよっと面白いわ」

「ちよつとお、耀子ちゃん？」

「それを言うなら佐々木こそ、特にずば抜けて良い訳じゃないのに西に対抗心燃やしててウケるわ」

「……彩ちゃんまで！」

三人寄れば何とやらで、慌てる紗智を手懷けながらも止まらない耀子と彩夏という……とても生き生きしている。

陰口の種類的にどうなんだろうと思いつつ、ありさが言っていた言葉にその通りだわ……と改めて同感した。

女性という生き物はいつまでたっても共通の話題の穴掘りに余念がないものだ。

コミュニティを設営するためとか仲間意識の表現方法だとか、難しい所に気を遣ったところでそろそろ止めに入る。

「そつえば耀子さ、女前ってどういう意味？」

「お？ああ、そうだったわね」

「なあに？それ」

「久尾坂くん？」

「そうそ、アキ……はそんなに知らないか。あんまり同じ講義とつてないみたいだし知らないのも無理ないけど。久尾坂くんの板に付いたレディ・ファースト精神は正しく女の身に立たなきゃ出来ないって話で、女前って新語が出来たらしいわよ」

「そこまで女性崇拜してる？」

「分け隔てなく優しいことは優しいよねえ。私、前に遠坂先生の講義でレポート運ぶの手伝った時、久尾坂くん頼んでないのに一緒に

してくれたもん」

「あら、やるわね紗智」

「うふふ。実は大事な用語が抜けてて、教授の部屋で書かせてもらうの頼みたかったんだって」

「あつさり言っちゃうのも流石久尾坂くんね」

「遅れて持つてけばいいのに。正直ねえ」

「まあ遠坂先生の講義、出席点ないわりかし楽な方だから採ってる人多いしね。去年見たけどあの量は運べる気になれんわ」

アツと言う間に流れる話題に思わず戸惑う。

レディ・ファースト？正直者？

（……女の子が性的に見れないだけで、私にも話しかけてきたんだから特に苦手ではないのか。でもそれって余計な誤解生む要因じゃないのかしら。それに正直者……？確かに聞けば内情教えてくれたけど、あれは切羽詰まってたからってだけじゃないんだ。ということはやっぱ自分についてあんまり懷に抱え込まないタイプってことなのか？）

人好きしそうな笑みを浮かべて、老若男女と関係なく優しく接する姿。

アキにとってほわほわと女性的なものより男性的な父親のような落ち着きの方が目立って見えただけ。

よくよく審美眼は疑惑尽きないものだ、温いカフェオレを煽った。

絶え間なくおしゃべりは続いていて、ふと耀子が零した発言が耳に届いた。

「　　そう言えばさ、久尾坂くんが女性に配慮出来るの。女役や  
つてるからって専ら噂なってたわね」

「…女役、って言うത്？」

「セックスでの女役ってこと？」

「彩ちゃん赤裸々っ」

「恥ずかしがることないでしょーよ。まだ明るいけど単なる言葉。  
論議と変わらないわ」

「彩夏こそ男前でしょ…」

「あらやだアキ、根に持ってたの？あんたは十分男前よ」

「フォローしてないじゃん」

「まあまあ。…でも、久尾坂くん、入学してからあのカツコ良さで  
すぐ噂になったけど。もう一つ流れたよねえ」

「あれでしょ？ホモだかバイだかつて話」

「え？そんなの流れてたの？」

「あの頃アキ、ほんと付き合い悪かったもんねー」

「ごめんって」

「アキちゃん奨学生ってだけで、毎回大変な講義採ってたもんねえ。  
ぎりぎりまでPC室いたし」

「後期になってようやく食事会顔出したわよね」

「いや、ほんと要領悪くて手の抜き方が分からなかったっていうか

…」

「そうそう。無理矢理一コマ手抜きが出来そうな課題の講義一緒に  
ねじ込んだっていうのに、親友が風邪引いた時しか代返頼まなかつ  
たもんねえ」

手前勝手なお願いをして、休んだのはその授業のみだったのを思  
い起こす。

毎回出るものだと思っていたためどうにも心苦しく必死に頼めば、  
レジュメ見るだけでわかるもんを病気の親友置いて来るんじゃない

と返されたのだ。

今考えると、己から踏み込もうと思ったのはそれからだった気がする。半年も同じゼミにいたくせに、少し酷い気もするが自己内で謝るに終わる。

「アキ弄りはこの辺にしといて。やっぱり苦手なあんたでも気になるもん？久尾坂くん」

「そりゃ…突拍子もなく性癖ひけらかされて安全牌だからシェア頼むって言われれば、多少気にするよ」

「おお？じゃあやっぱりその手の話題は真実な訳か」

「頻繁に女の子告白されてるのにねえ…何かやなことでもあったのかなあ？」

「彼氏でもない男が男が好きって言っても、へえってしか返せないけど。あの顔で相手は男と想像すると、いけない気分になっちゃうわね」

「あら耀子、妄想癖うつった？」

「別に穴があるんだから突っ込むだけの事実妄想癖だとか言うない」

「……耀子ちゃん？」

「ウフフ。嫌ですわ耀子ったら、いけないっ」

「仮面被るの止めなさい。わりと似合ってるからキャラ付くわよ」

「お褒め預かり誉れですわ。まあ、十分社会適合できてイケメンで友達多いんだから。魅力的なのは確かよねえ」

「…あのさ、3人ともよく顔見るんなら、知り合いじゃないの？」

「んー？確かに講義はたまに一緒になるけど、大講義が多いから話しかけるつてもねえ」

「福岡先生のゼミ、典型的理系だから話題に出来ないもんねえ」

「あー…確か、西がたまに久尾坂くんの仲間内の唐沢くんと話してるの見るわ」

「唐沢くん…」

「ああ！そっぴや見たわ。男子高育ちの典型デビュー系！人が良いけどよくフラれちゃうの」

「…細身で、黒髪アシメの、猫系？」

「…皆の衆、アキが男の顔を覚えている…っ！」

「ちよつと」

「お赤飯日和だね、アキちゃん」

「鉄壁も崩れ落ちたか、モーゼの男前」

「……ワタルくんが一緒に帰ってっただから、見ただけ……！」

思いのほか大きな声で、思わず姿勢を低くする。

何やらがやがやと背後が騒がしいけれど、見ない見ないあたしは何も見ない。

ぽふん、と頭に柔らかい掌が当てられて身体をビクつかせる。

「…まさか名前呼びとは。進んでるわねアキ」

「…耀子？」

「ごめんなさいな、悪ふざけが過ぎました」

よしよしとばかりに撫でられて、温かい体温が離れて行った。

自制出来ずに身体を揺らしてしまっただが、気にしないことにしてくれたようだった。

「だって、久尾坂ってコウサカみたいで言いにくいし分かりにくい、って…」

「直々に言われたんならそうしなさいな、顔だけ知ってるのと比べ

れば会話したことあるってのは一歩前進よ」

「そうそ。今までゼミ以外で男の名前なんて教授と事務室系統のオッサンたちの名前しか覚えてなかったんだから。格段の進歩よ」

「アキちゃん、ちよつとでも男の子に慣れると良いねえ。 頑

張ろっねっ」

「…うん。ありがとう」

思いもよらぬ言葉をかけられて、気が抜けた。

優しい子たちだと、素直に思う。

有名な男子生徒と知り合いだといっても、鼻にも欠けず。ちよつとばかり、肩を押し上げてくれる。

女の子に対してでも、少しビクつくのだ。前進といっても遠いものだ、と、上体をあげた。

「でもさ、唐沢くんはともかく久尾坂くんがああ、斎条くんと仲良いつて意外な話じゃない？」

ネタが降ってきたのか、楽しげに彩夏が話す件の人物。

アキが浮かびもしなかったのは言うまでもない。

「ああ、そうねえ。あの男らしい男性的な魅力のある堅気の斎条くんと、柔和な物腰だけどわりとやんちゃな久尾坂くんは確かに異質だわ」

「?…よく一緒にいるの?」

「斎条くんわねえ、建築学科なんだよ。学科違うけど、女の子と話

すの全然見たことないなあ。無愛想っぽいけど、普通に中庭で久尾坂くと笑って話してるし」

「あの面子は良くも悪くも目を引くからねえ。えーっと、確か斎条くんと久尾坂くと唐沢くんには？大槻くんと、葛くん、立花くん？」

「多い…」

「6人くらい覚えときなさい。2回じゃ一番のイケメン変わり者軍団だから。上級生はそこまでフリーいないし」

「そういう話かい。…でもなんだっけか、斎条くんは久尾坂くんと地元一緒？で建築と経済の橋渡しになってて。唐沢くんが久尾坂くんとゼミ一緒で？葛くんと立花くんが同じサッカーサークルだかなんだかで、そこに唐沢くんが引つ張り込まれた形で？なし崩し的に大槻くんと知り合ってたっけ」

「…とりあえず、仲良しグループなんだねえ」

「西談義か。さすが耀子ね、玉の輿狙い？」

「西は年下のロリコンよ」

「マジでっ？！」

「あいつテレビ見ながら女子高生上がり立ってって良いよなーって私の目の前で言ったのよ？」

「何て返したの」

「『じゃああんたが捕まらないように法整備して隠れ蓑になるからお小遣い頂戴！おにいちゃん』」

「……………ないわ…っ！耀子もないわ…ッ！！！」

「彩ちゃん笑いすぎ。でも、西くん満更でもなさそう」

「…そう！もう一回言ってみて、とか言われて流石に私も引いたわ。病院の地図プリントアウトしたら妙な顔してたし」

「……あ、っはっはっはっは！西っ！西っ！！！」

「彩ちゃん落ち着いて…何があるかと思っちゃうよみんな、」

級友の新たな性癖が発覚したところで、彩夏が笑い発作のために



お茶会は解散となった。

何とも言えない気分で西くんをこれから見るだろうなあと思つと、また彩夏は腹を抱えて笑つて。

そんな彩夏を紗智は支えながら、それでもピクツと口元を動かして耀子と言え、西にアキがJK萌えとかキモいつて言つてたつて話すわーとけらけら笑いながら階下へ降りていく。

明るいかしもし娘と教授に称された彼女たちのあだ名に虚偽はなく。

アキも明るい気分で、入ってきた情報をあれこれ整理しながら彼女たちとともに帰路につくのだった。

？【女が四人集まれば何とやらで】（後書き）

おまけ【後日余談】

「……西っ、西っ……！」

「……おい耀子！この笑い苺患者どうにかしろよっ……！」

「えゝ、やあですわゝJK萌えとかキモい」

「ツ……！！ 秋本さん、違うからね。女子高生良くなって言ったのは若い肌が綺麗だなーって意味で」

「貴様ツ！西イ……！！」

「……あっはっはっは……！！！」

「……語るに堕ちたね、西くん」

「耀子ちゃんと西くん、すごい走るのはやーい！」

一陣の風が研究室棟を吹き抜けたのは、言わずもがなである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5237w/>

---

彼と私のライフワーク

2011年12月17日20時53分発行